「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑳

リレーエッセイ

ニホンザルを追って

京都府京都市　大井　徹

私は野生動物の生態研究を仕事としている。現在は京都にいるが、一九九一年から十年間は盛岡に勤務していた。その時以来、五葉山の魅力の虜になり、現在も五葉山での調査を継続している。

中には人を寄せつけないがゆえに人を魅了する自然もあるが、五葉山はそんな人跡未踏、原始の山ではない。仙台藩の御用林として厳しく守られてはきたが、ヒバ、ケヤキなど用材の伐採が行われていた。

また、山中を歩けばあちこちで炭焼きの跡を見つけることもできるし、畳石あたりまでは牧野として利用されていた時期もあったと聞く。さらには、ここで狩りをする人もいれば、山菜をとる人たちもいた。

すなわち五葉山は、地域の人たちに利用され、その生活に密着して存在してきた山といえよう。しかし、その一方で、空にはイヌワシ、オオワシが舞い、地上にはクマ、シカ、サルなど野生の獣が跳梁する場所でもある。

シカやサルは、東北地方にはかつて広く分布していたが、狩猟によって、昭和初期までにほとんどの地域で絶滅した。それに対し、五葉山ではその両方が生き残った。

それでは、このサルのことについて少し詳しく書いてみよう。サルは、現在、北東北で五葉山を含めて下北半島、津軽半島、白神山地の四地域にしか生息していない。

しかし、江戸末期までは現在よりかなり広い範囲に生息していたことが分かっている。岩手県内でもそうで、明治二年に刊行された南部藩産物調では、現在は生息のない遠野、大槌、宮古、野田の産物としてサルが挙げられている。

その後昭和初期にかけて東北の多くの地域でサルは狩り捕られ絶滅に至った。県内在住の作家・遠藤公男さんの「帰らぬオオワシ」には、宮古市重茂半島のサルが乱獲により滅びていった様が描かれている。

五葉山地域は岩手県内で唯一サルの群れが生き残った地域なのだ。これまでの私の調査で、現在、四つの群れ、合計七十頭程度が生息することが分かっている。

なぜ、この地域でサルが残ったのか不思議であるが、自然と共存しながら、上手に利用してきた先人の知恵や自然への態度ゆえではないかと考えている。

調査は、マンサクの花のほころびはじめる早春を中心に行ってきた。この時期の五葉山は比較的天候が安定している上に、堅雪で歩きやすい。

また、木々は葉を落とし、林内の見通しもよく、雪の上にサルの足跡もつくのでサルの探索も容易だ。まだ冷たい風を頬に受けながら、堅雪の上を歩くのは実にすがすがしい。しかし、風のように現れては、また、姿を隠すサルを捜すのはたいへんだった。なかなか集まらないデータに気持ちが萎えたこともあったが、地元の方の力づけ、五葉山を思う気持ちに支えられて調査を続行してきた。

やがてサルに発信機を装着して効率よく調査ができるようにもなった。この地域のサルが独特な遺伝子をもっていることも分かった。東北の多くの場所のサルは1型と呼ぶ遺伝子タイプを持つが、五葉山のサルだけは2型と呼ばれるタイプなのだ。

どうして五葉山のサルの遺伝子が独特なのか、まだ、よくは分かっていないが、氷河時代を生き延びたニホンザルの祖先がたどった歴史と関係があると考えている。

現在、野生動物との共存が強く求められている。北東北本来の動物相、自然が保たれてきた五葉山、そのような自然を残してきた先人の知恵、態度に、人と野生動物の共存のあり方が学べるのではないかと考えている。

【執筆者プロフィール】京都市在住。森林総合研究所関西支所生物多様性研究グループ長。西日本を中心に野生動物の調査研究を行っているが、五葉山での調査も継続。著書に「獣たちの森」（東海大学出版会）、「森の生態誌」（古今書院）など。後者には五葉山も登場する。

五葉山で生息を確認したニホンザル